
凜として咲く月の如く

秋風 楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

凜として咲く月の如く

【Nコード】

N5360Q

【作者名】

秋風 楓

【あらすじ】

楽しみにしていた高校生活！！主人公、天草あまくさ 咲月さつきは夢いっぱい、期待いっぱい入学する。でも、この学校は男女共学のはずなのに校舎が男子と女子で別々だった。しかも、自分のよく知っている人達はなぜかファンクラブがあり気安く近づけなくなっている。そこで出会った新しい友達との学校生活だが・・・

1 私たち高校生になります

桜が舞う季節になった。

私、あまくさ さつき天草咲月は今日から新高校生になります。

ピンポン

家のチャイムが鳴ったと思ったとたん、ドアの向こうから大きな声が聞こえてきた。

「おい、さつき！！いつまで着替えてんだよ！！今日は入学式なんだから早くしろよな！！」

「ご、ごめん橙真くん！！今行くから！！」

ドアの外で怒りながらも待っていてくれるのは

私の家の隣に住んでいる水無月みなづき 橙真君とうまだ。

私が住んでいるのは、キレイとは言えない作りのちょっとしたアパート。

そして1人ぐらし・・・

どうして1人ぐらしなのかと言うと、私の父親は医者であり、薬の研究もしている。

母親は私が小さい時に事故で死んでしまったらしいから父親と2人暮らし。

でも、私が小学生の頃、父親が研究で忙しくなる日が増え、家に帰って来ることが出来ない日が続いた。

そんな私を心配した父親はとあるアパートに私を預けたのだ。

このアパートは普通とちがっていて住人が家族のように暮らしているというものであった。

住んでいる場所は別々だが、食事は全員一緒に1階の食堂でする。

それに、住人全員が大体は食堂の横にある大広間で1日を過ごしているのだ。

だから、父はここを選んだんだと思う。

あのときは引きこもりがちだったけど今はもうアパートの人とも仲が良く

本当の家族のように思っている。

・・・といっても、たったの7人なのだが、

橙真くんもその一員である。

ガチャ！！

「ごめんね、遅くなっちゃった!!」

「おせーよ、ホントに!! さつきは昔からとろいんだから!!」

「・・・橙真くん、怒ってる?」

「怒ってねえよ!! それよりほら!!」

橙真くんはなにやら自転車の後部座席をポンポンと叩いている。

「??」

「ほら、早く乗れ!! おまえが遅いからこれじゃなきゃ間にあわねえだろ」

「いいの? 私おもいよ?」

「おまえ軽いじゃねえか! しつかり飯食え!!」

そう言われて私は自転車に乗った。

すると橙真くんは満足げにほほえんで私を乗せた自転車をこいで行く。

今日から私たちは高校生になります!!

1 私たち高校生になります（後書き）

だめだめですが、読んでくれた方感謝です^^

2 私たち学校にいます

私たちは学校に着いた。

自転車で来たから時間には余裕があるみたいだ。

そのせいもあって校舎の前にはまだいっぱい生徒がいる。

「橙真くん、クラス見に行こうよ！」

私は橙真くんの制服の袖を引っ張って掲示板の方へ走っていった。

「あつ、見て橙真くん！！私たち同じクラスだよ」

心細かった私は橙真くんと同じクラスだった事に心から喜んだ。

「ほんとだな！やったぜ、咲月！！でも校舎は違っんだよね・・・」

「あ、そっか・・・」

忘れがちだがここは男女別々の校舎なのである。

でも、橙真くんも喜んでくれているみたいで嬉しかった。

「ちょっと、なに2人手なんか繋いじゃってるの？」

「げ、総史郎！！」

「総くん、じゃなかった。古城先輩!!」

この人は私と同じアパートに住んでいる古城 総史郎さん。

私より1つ年上である。

先輩は私が 古城先輩 と呼んだことにムツとしているようだ。

「いつもの呼び方でいいのに。君ってホントにくそ真面目だよね。」

そんなことを話していると、私たちに誰かが近づいてきた。

「まじめなのは良いことだ。総史郎、あんたも少しは咲月を見習え!!」

「うわ、亮くんまで・・・」

この人も私たちと同じアパートに住んでいる人で、日向 亮さんだ。

古城先輩と同じ学年。

「日向先輩、おはよう御座います。」

すると、日向先輩も私の言葉にムツとする。でもすぐに微笑んでくれる日向先輩はやっぱりいい人だ。

「その方が、面倒な事にはならないだろう。」

「面倒なこと??」

私は言っている意味が分からなくて首をかしげた。

でも先輩は私の疑問には答えてくれない。そのかわりに頭をなでてくれる。

「??」

私はいろいろと考えるがやっぱり分からない。

するとその時後ろから橙真くんの悲痛な声が聞こえてきた。

「おい、総史郎!! かえしやがれ!!!」

どうやら橙真くんは古城先輩に何かをとられたらしい。

橙真くんは私の事など気にせずそのまま走っていつてしまう。

「え、うそ! 橙真くん!!!!」

それに、日向先輩も風紀委員の人に呼ばれて仕事に戻って行ってしまった。

今、私は1人ぼっち……

教室に行こうとも行き方なんて分からない。

周りにいる人達は知らない人ばかり。

(せめて同じクラスの人とか……)

そう思った時だった、

「・・・あなた、もしかして迷ってる？」

私の後ろで女の子の声が聞こえた。

2 私たち学校にいます（後書き）

読んでくれた方感謝です^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5360q/>

凜として咲く月の如く

2011年10月8日17時16分発行